

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 江原由美子

本論文は社会的文化的性別を意味するジェンダーが、いかに社会的秩序のうちに構造化され、個々人の慣習的な日常的実践（ハビトゥス）をつうじて再生産されているかをモデルとして提示する理論的な研究である。「ジェンダー秩序」とは「ジェンダー化された主体に適用される相互行為上の規則や慣習の違い」をさし、「性支配」とはその結果、異なる社会的行為能力を付与されたジェンダー化された主体相互のあいだに生じる権力の格差をさす。本論は「性支配」をめぐる、(1)たんなる法規範上の平等に還元されず、(2)個人がジェンダー化される過程を説明し、(3)ジェンダー化された主体の選択肢の範囲の違いを論じ、(4)そのうえでジェンダー化された主体の選択能力を否定しないが、(5)にもかかわらずジェンダー化された主体の合理的な選択が性支配を再生産するような、(6)歴史的な起源ではなく構造的な再生産を説明できるジェンダー秩序のモデルをつくるという課題に挑戦し、それを一定程度達成したと言える。

本論の構成は以下のようになっている。第1部で社会的行為および権力、ジェンダー、性支配等の概念について理論的な考察をしたうえで、ブルデューに依拠して、構造と実践の関係をジェンダー・ハビトゥスの概念によって循環的につなぐ。第2部ではコンネルのジェンダー秩序の概念を批判的に再構成し、ジェンダー秩序の主要構造を性別分業、異性愛規範からなるとしたうえで、それを支えるジェンダー体制を家族、職場、学校、諸制度、儀式、メディア、社会的活動の各分野に分かつ。そのうえで実証的なデータを示しながら、ジェンダー秩序がジェンダー体制のもとでの「事実」と循環的な関係にあることを論理的に示す。第3部ではジェンダーの再生産と変動について、日常知および科学的な専門知がともにジェンダー知を産出していることを論じ、性支配がミクロな実践からマクロな構造にいたるまでフラクタル的に一貫していることを示す。おなじことは裏返して、どのようなジェンダー秩序の再生産の現場においても、もとの秩序とは異なる意味が生産される可能性があることを意味する。

従来のジェンダー理論は意識か実践か、行為か制度か、構造の再生産か変革かのいずれかの水準にかたよりがちであり、そのどちらをも通底して一貫性の

ある理論枠組みで説明することが困難であった。本論はその限界を破り、行為の意味を個人の内部にではなく個人間の相互行為におくことによって、行為の水準から構造の水準まで、ミクロとマクロのレベルを貫通するジェンダー秩序の再生産と変動のモデルを示すことに一定程度成功した。一貫性のある理論のつねとして、本論にもジェンダー秩序を閉鎖系として循環論法で説明する傾向があり、その結果として変動についてはかならずしも十分に説明できていないらみはあるが、その限界は他の論者によっても共有されており、本論に固有の弱点とはいえない。

本論が現象学的社会学から出発した著者のジェンダー理論の集大成であり、日本におけるフェミニズム理論のひとつの到達点と言えるものである。以上のことから本論文を博士（社会学）の学位にふさわしいものと判断する。